

「私の論文作成法」

客観的で説得力ある社会科学分野の論文作成のために、プロジェクト形成の手法を応用する

佐原 隆幸（拓殖大学国際学部教授）

私の論文作法はプロジェクトの形成手法をメタモデル¹としている。可能な限りこのモデルの要素を盛り込むことが理想である。分解すれば6つの局面がある。

6つの局面

1. 利害関係者を明らかにする。

どのような課題も白地に絵を描くようなものはない。社会科学の論文であれば特に、課題の背景には必ず利害関係者が存在し、現状を改変しようとする場合、それを歓迎する側と抵抗する側がいる。

歓迎する側も支援できる内容は異なる、解決行動にお墨付きを与えるなどより上位の立場から正当性を付与することができる者、資金的支援など経済的な手段の提供まで及ぶことができる者などである。マスコミなど世論形成で応援する者も確認したい。

あわせて課題解決に当たる当事者についても、その抱える問題、なぜその課題解決に向き合う必要があるのか、課題解決に成功した場合どのような報酬が得られるのか、具体的な課題解決の手段は何かを明らかにすることも必要となる。

これらをグループ分けし、課題の背景にある社会経済的な力関係を明らかにできれば、理想形に近づく。具体的には以下の表を完成させる。集団 1-4 全て完成させる必要はない。

集団	制度変更で受益する集団	制度変更で悪影響を受ける集団	制度変更を実行する集団	制度変更にお墨付きを与えられる集団	制度変更に財政的支援を提供できる集団	制度変更を支援する外部の集団
集団 1						
集団 2						
集団 3						
集団 4						

2. 直接の課題だけでなく、関連課題も確認し、課題の構造を確認し表現する。

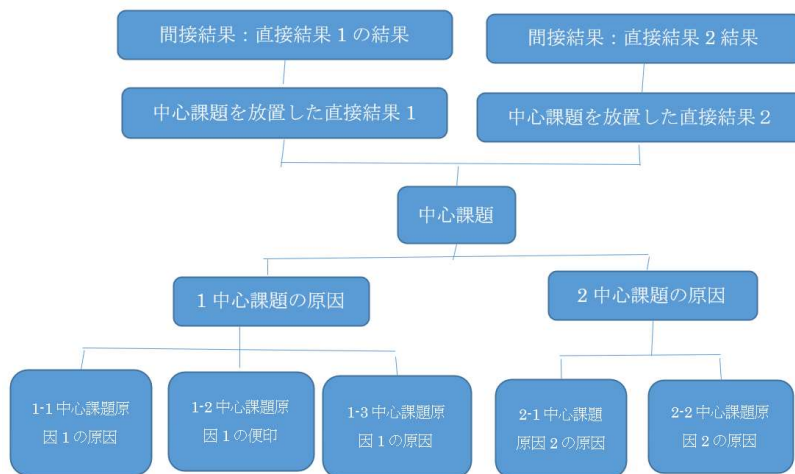
分析対象の課題だけでなく、関連する課題も併せて確認し、課題間の因果関係を分析する。

¹ メタモデルとは、メタ (beyond 超えた) という意味が示す通り、具体的事象を超えて目指すべき理念形を示す。プロジェクトを形成する際の留意点として確認するチェックポイントが、客観的で説得力のある論文作成のポイントと重なりあうところが多いのに着目し、これを応用することを提案している。

「原因」「結果」の論理で、中心に直接の課題を置き、その背景をなす根深い課題を下方に展開。この際同じ課題の裏側にある根深い課題であっても相互に独立していれば並列に、課題間の因果関係がある場合には上下に整理する。

次に直接の課題解決が進まないことからたらされる結果を上方に展開。この際もたらされる結果が複数あるとして、相互に独立していれば並列させ、因果が認められれば、縦方向に配置する。

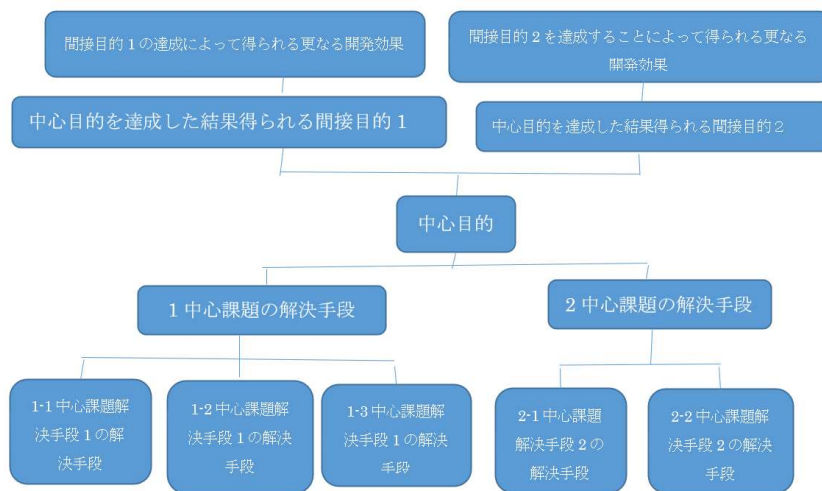
結果として全体として下から上に向かって「原因」「結果」の論理で視覚的に課題の構造図として表すことができれば理想形に近づく。具体的には以下の図を念頭に得られる情報を盛り込んで完成させる。



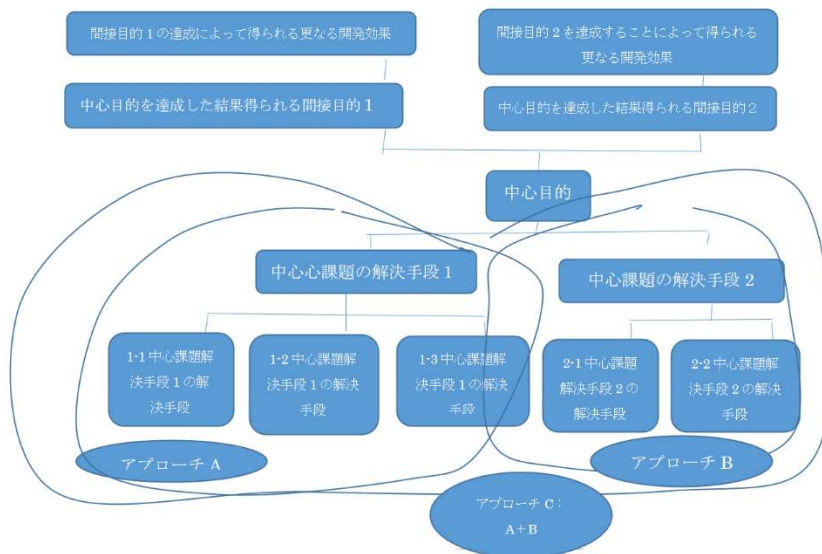
3. 課題解決の手段を可能な限り具体的に、かつ構造的に表現する。

課題の構造図が完成すればそれを引き継いで解決策を探す。手段を探り具体的な入口を見出す。この際に使用する論理は、下から上に「手段」「目的」(means-ends)の連鎖である。手段が不足する場合は追加的に検討する。課題解決に至る手段群を、アプローチとして一括りにする。この一括りの作業は、論理性でくくる。複数アプローチの組み合わせも検討し、組み合わせの方が課題解決の実現可能性が高ければ、組み合わせを選択する。課題解決の当事者が触れるものと触れないものを区分できれば理想形に近づく。

3-1 手段の同定



3-2 アプローチの抽出



4. コスト、技術的な難易度、社会的な反発で相互比較し実現可能性を判断する。

上述のアプローチを、コスト、技術的な難易度、社会的な反発の大小で相互比較し、現時点での実現可能性を判断する。この判断が求められる課題は満ち満ちている。たとえば後期高齢者の医療費負担の所得制限ラインの設定の問題では社会的反発の大小についての考慮は欠かせない。あるいは業務のデジタル化については、インフラの整備を含む技術的な難易度の検証は欠かせない。これら 3 点をクリアして、課題解決に近づくアプローチが確認できれば理想形に近づく。具体的には以下の表を使う。

アプローチ	アプローチ A	アプローチ B	アプローチ C
-------	---------	---------	---------

コスト（大小）			
技術的難易度（難易）			
社会的反発（大小）			
実現可能性（大小）			

5. 外部条件とのかかわりを考慮しつつ、提案をロジカルモデルで表現する。

課題解決には何をすべきかがわかったところで、その前提条件（上記の例では医師会が協力する、通信網が全国津々浦々で光ファイバーに置き換わり安定性や速度に問題が発生しない）、外部者との連携を盛り込んだストーリーの展開を4行4列のマトリクスであらわす。ストーリーには指標（何が何時までに何処まで変わる）を振り、進捗管理可能な形とする。併せて、進捗をチェックするデータの入手元を明示できれば、理想形に近づく。

ロジカルフレームワーク例

概要	指標	データ入手手段	外部条件
上位目標			政策要因
目標			環境要因
成果			外部組織との関連
活動	投入（内部）	投入（外部）	活動の結果を維持する条件
			前提条件

4. アクションプランの作成

課題解決型論文のくくりは提言で終わりたい。それには、期限の設定、期限内の作業の流れ、各作業の具体的成果品の明示、作業責任者、作業実施者、ヒト・モノ・カネの調達方法、外部組織の協力が必要な場合の留意事項を含めて、具体的に提案することが必要となる。結論がアクションプランの提示で終わることができれば理想形に近づく。

アクションプラン例

活動	成果イメージ	実施時期	責任者	実際の実施者	資金・資材・ノウハウの調達方法	外部組織との連携	その他留意事項
活動1							
活動2							
活動3							

ほぼすべての対象に適用可能

論理モデルをメタモデルにするとほぼすべての事象が整理可能となる。たとえば、池袋の北口周辺の中華街構想をめぐる、2008-10年に華僑側と地元商店会側がまちづくりを巡り激しく対立した事件があった。これなどは格好の分析対象である。東京中華街構想を打ち上げ、国境を越えて資本の導入を図り街の活性化をめざす華僑側と、地元の清掃や照明など地道な人間関係づくりを大切にしつつ住みやすいまちづくりを目指す地元商店会側に歩み寄りの可能性はないのか。両者の懐に入ったインタビューと2次資料をもとに、提案の裏を取り実現可能性を探ることで、政治性を持った課題の整理にも応用可能である。

途上国の少数民族や女性の地位向上を促進する、援助のアプローチを分析することも可能である。たとえばマイクロなプロジェクトの重要な決定を地域社会にゆだねる方法として世銀でも採用されている方法にCDD(community driven development)と呼ばれる手法がある。末端住民を組織化し、活動内容や資金使途をグループで管理することで援助資金の使われ方を相互監視し、エリートによる乱用を防止する手法である。CDDが使われた事例を検証し、対象住民の所得レベルの向上を直接的な証言と2次資料による三角検証で確認する。意思決定会議での女性の行動の変化も同様に確認できる。

政策の妥当性の検証も可能である。地方創生は自民党の主要政策であるが、すでにその効果について検証すべき時期に来ている。財源確保の手段として導入されたふるさと納税は期待された効果をもたらしているのか。財源を奪われる都市側にはどのような問題が発生しているのか。利害関係者分析、問題分析を行った上で、その仮説をインタビューや2次資料で検証することができれば説得力のある政策評価を行うことができよう。

その他、地方でのインフラ整備、公共交通の利用促進のための新しいソフトの導入から果ては台風被害に苦しむ館山市での海鮮料理店構想の実現可能性の検証、インドネシアの給水システムの改善や離島の小学校の改築、さらには民族紛争まで、応用事例には事欠かない。

費用便益分析ができればほぼ理想

提案型の論文である限り、そのコストと便益をキャッシュフロー表で表し、金銭価値による評価を行う費用便益分析を当てはめる必要がある。提案の説得力を格段に増す方法として使用する。適切な目安がなければ代替指標²で計算するなど想像力を働かせる必要があるが、これが加わることの効果は大きい。

以上私の目指す論文作成法を紹介したが、理想形の実現には時間と集中力そして情報収集力が必要である。この理想形(メタモデル)に沿って卒業論文、修士課程の論文および博士論文の指導をしているが、実際は理想形の6割が達成されれば合格ラインとしている。それでも、世の中にあふれる主観と客観の区別がつかない意見表明論文よりはずいぶんとましなものができる。今後とも、学生指導の背骨をなす考え方として、また私の論文作成法の理想形として堅持していきたい。

² 例えばバングラデシュのトイレ導入プロジェクトの効果には医療費の低減などあるが、女性の安全安心もあるとされている。これを測る目安として、従来連れ立って用足しに行っていた付添人が不要となることから、その時間の節約で測るなどで対応する。

Reference: FASID 開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント (和・英) 1997
年 3 月